産業衛生学演習（Graduate Seminar of Industrial Hygiene）

担 当 教 員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
柴田 英治	1年次 後 期	選択	2	48	演習	あり	巻末掲載	可

授業概要（内容と進め方）及び課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	産業衛生学演習では、産業衛生技術、作業環境測定など、測定や評価を伴う方法を用いた学術論文を読みながら、使用された機器、技術、考え方などについて討論し、学修を進める。産業医経験を有する実務家教員、柴田英治が担当する。 課題に対するフィードバック方法／レポートに対して優れた点、修正すべき点などについて討論するほかコメントをつけて返却し、今後研究を進めるにあたり、役立てることができるように配慮する。 実務家教員（柴田）が実施する。
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー②「専門職業人として医療に対する幅広い知識と技能を駆使し、高度な臨床検査を実践できる。」及び⑤「自ら積極的に臨床検査学の課題を探求し、主体的に解決しようとする能力と研究的視点を備え、科学的探究心を持ちながら継続的に研究を遂行できる。」の達成に寄与している。
到達目標（履修者が到達すべき目標）	1. 産業衛生分野の論文を読み、その目的、方法、結論などを述べることができる。 2. 産業衛生分野の論文を読み、その意義を説明できる。 3. 産業衛生と臨床検査の共通点、相違点について説明できる。
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	第1回～第24回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく／予め指定した論文を読み、その内容を概説できるようにしておくこと（各30分） 第1回～第24回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める／毎回の講義の復習を十分行うこと。（各30分） ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位15回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位15回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。

授業計画			
	第 1 回	産業衛生分野の論文抄読（化学的環境1）	柴田英治
	第 2 回	産業衛生分野の論文抄読（化学的環境2）	柴田英治
	第 3 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（化学的環境3）	柴田英治
	第 4 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（化学的環境4）	柴田英治
	第 5 回	産業衛生分野の論文抄読（物理的環境1）	柴田英治
	第 6 回	産業衛生分野の論文抄読（物理的環境2）	柴田英治
	第 7 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（物理的環境3）	柴田英治
	第 8 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（物理的環境4）	柴田英治
	第 9 回	産業衛生分野の論文抄読（社会的環境1）	柴田英治
	第 10 回	産業衛生分野の論文抄読（社会的環境2）	柴田英治
	第 11 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（社会的環境3）	柴田英治
	第 12 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（社会的環境4）	柴田英治
	第 13 回	産業衛生分野の論文抄読（排気装置など工学的対策1）	柴田英治
	第 14 回	産業衛生分野の論文抄読（排気装置など工学的対策2）	柴田英治
	第 15 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（排気装置など工学的対策3）	柴田英治
	第 16 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（排気装置など工学的対策4）	柴田英治
	第 17 回	産業衛生分野の論文抄読（保護具1）	柴田英治
	第 18 回	産業衛生分野の論文抄読（保護具2）	柴田英治
	第 19 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（保護具3）	柴田英治
	第 20 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（保護具4）	柴田英治
	第 21 回	産業衛生分野の論文抄読（産業看護1）	柴田英治
	第 22 回	産業衛生分野の論文抄読（産業看護2）	柴田英治
	第 23 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（産業看護3）	柴田英治
	第 24 回	産業衛生分野の論文プレゼンテーション（産業看護4）	柴田英治

評価方法 評価基準	論文の理解度60%、プレゼンテーション40%を併せて評価する（100%）		
教科書	特になし	参考書等	必要に応じて資料を配布する。
学生へのメッセージ	産業衛生学は働く人々が健康かつ安全に働くことができる環境をつくるとともに、産業活動の中で生じる様々な有害環境ばく露への予防対策を考えるための学問である。作業環境の評価や有害要因の測定方法と臨床検査で用いる手法との共通点、相違点など関連を考えて受講すること。		